

私の自治の歩み その1

北海道地方自治研究所では、戦後北海道自治の政策・制度や画期となった事柄についての調査・実証研究の一環として、自治体に関わった方や、自治体の政策、制度開発に携わった方に当時の状況をお聞きして記録を残すことにし、最初は元名寄市長の桜庭康喜さんに、ご自身の自治の歩みをお聞きしました。数回にわたって掲載します。

1 市職員になって組合活動に熱意を注ぐ

証券会社を退職

名寄へ戻り市立病院で臨時職員に

(まず市役所職員になったいきさつ、組合活動に関わったいきさつを教えてください。)

短大を卒業したときは、とにかく貧乏でしたので、お金がほしくてしょうがなかった。教員になるうかと考えたけど、当時は小中学校教員の給与より、証券会社の初任給の方が倍近く高かった。この頃の証券会社は、お客のところについて株や投資信託の売買代金の現金授受があるので、資産のある保証人がいなければ採用されませんでした。通常であれば多くても入社試験は三回なのに、

母子家庭であるがゆえに五回も試験をされて、絶対に会社に入ってやると意地になりました。山崎証券、のちの山種証券で大阪に本社があり、売りの名人といわれた山崎種二氏が創業者の会社で、とにかくお金がほしくて証券会社に入りました。

入社して一年間とにかく頑張りました。分からないことは勉強し、若い私を信頼してくれるお客さんができて、株を勧めたけど、一週間が過ぎ、一月経つても、値動きがなく上がらない。それどころか下がりはじめると、お客さんに嘘をついた気がして、夜も眠れなくなる。

そんなことがあって、自分の性格から金儲けは無理だなと思いました。元々教員になりましたので、当時短大でも教員二級の免許がとれたので、

道の教員採用試験を受けて教員になろうと思いい、証券会社を辞めて名寄に戻ったのです。

ぶらぶらしている訳にはいかなかったので、土建屋のコンクリート練りのアルバイトなど色々していました。たまたま、同級生の父親が市立病院の事務長で、病院の会計処理を伝票方式にする検討をしていたので、商業学科を出たのなら伝票制を知っているだろうから手伝ってほしいと言われ病院へアルバイトに行くことになりました。

名寄市職員採用試験に合格

採用の辞令がなく直談判

一週間ほど病院に通うと、市の職員採用試験に受かった人しか、臨時として雇えないので、採用試験を受けてくれと事務長から言われたのです。市役所に入ろうという気持ちが高かったため、どうしようかと思いましたが、教員採用試験の勉強をするためには土建屋のアルバイトも大変だったので、採用試験を受けることにした。

試験を受けに行ったら、来春卒業予定の高校生が五〇人くらい来ているし、そして市役所に入っ

た高校の同級生が試験官。ラバさん試験できたかい……と言われたりしてね。

人生は本当に皮肉な巡り合わせがあると思います。採用試験のときの面接官は、道から派遣されていた総務部長で、後に市長選挙で対決することになった中尾忠司さんだったんです。

市職員の採用試験に受かって、四月になるまで市立病院で臨時として勤めていました。じつは教員の採用試験も受けていて、宗谷管内豊富町の兜沼に行く気があるのなら採用すると連絡が来たんです。病院の事務長には教員採用の連絡がきたけど、本当に市役所に採用されるのであれば、教員は断りますと伝えました。

姉たちは結婚して家を出ていたので、母親の面倒をみなければならず、転勤する仕事ではなく、地元にしたほうがいいと思ったからです。事務長からは市に採用されるから教員は断れと言われました。

ところが四月になって採用の辞令がでない。五

月になっても辞令が出ないので、頭にきて、事務長と市役所総務部長に「一体どうなっているんだ。こんなデタラメなところに勤める気はない」と言ったのです。事務長に説明をして教員採用を断ったのだし、勉強をし直して再び教員試験を受けるから、一年間所得保障をしてくれと迫り、大げんかしたのです。そしてようやく一九六三年六月

一日付けで採用辞令が出て、市役所に入りました。市役所に勤めてみたら、なんともぬるいというか、ゆるい、という感じなんです。一年間、生き馬の目を抜くような証券会社での猛烈社員教育で鍛えられた者からすれば、これで給料が貰えるのかと正直そんな思いになった。

これでは逆に身が持たないと思つてるとき、ちょうど病院の労働組合と市役所の労働組合を一緒にする議論がはじまりまして、おもしろいなあと思ひ、組合活動にのめり込んでいきました。もし組合活動をしていなかったら、きつと市役所を辞めていたと思います。その後、結婚を機に社会

党に入党しました。若気の至りでキザな言い方ですが、市役所のなかで管理職の道は絶つ、自治労の組合活動家として市役所生活の一生を終える、という覚悟でした。こうして市の職員としてスタートしました。

父親が亡くなり母子家庭に 札幌での学生生活と安保闘争

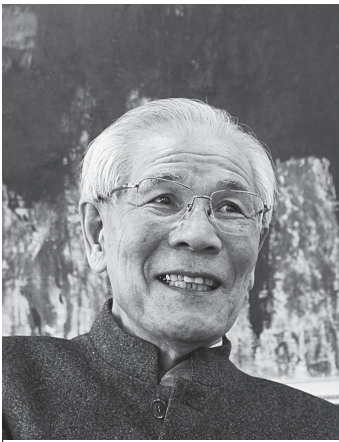
（革新運動活動家として歩むきっかけについて教えてください）

二つあると思います。

私が一二歳のとき、一九五四（昭和二九）年に父親が亡くなりました。男は私一人、上に姉二人、下に妹が三人いて、祖母と母親の女七人のなかで育ちました。父が亡くなったとき、一番上の姉は高校二年生でした。

当時の名寄町役場の生活保護の担当係長が家に来て、お袋と姉二人そして私とで、母子家庭になつたので生活保護世帯の対象になる条件などの話し合いをしました。その時に係長が言ったのは、高校二年生の姉は高校を退学させて就職をさせ、その上で収入が不足したら、生活保護の対象になるとの説明でした。姉が高校に行つていけば、生活保護の対象になりません、という話しをしたのです。そのことが私の心に焼き付きました。

姉ちゃんはあと二年頑張つて高校を卒業したら、働いて家族を助けてくれるのに、高校をやめ



桜庭康喜(さくらば やすき)

1942年北海道名寄市生まれ。1962年札幌短期大学（現札幌学院大学卒業）、63年名寄市職員、1971年名寄市議会議員（4期15年）、1986年名寄市長（3期10年）、1996年北海道地域活性化センター理事長、2000年北海道国際文化交流協会代表、2008年～18年北海道地方自治研究所理事、2009年旭川大学大学院非常勤講師など。1996年、五十嵐広三さんの後継として衆議院選挙に立候補し落選（2000年衆院選挙落選）。主な著書に、全国青年市長会編『青年よ、故郷に帰って市長になろう』（1994年、読売新聞社）、『消えたマチ 生まれたマチ』（2010年、北海道地方自治研究所全国市区町村訪問記録編集委員会）。

させなければ生活保護の対象にならないとは、そんなバカな話があるのか。オレが大人になつたら役所、役場の対応は許さない、という反骨心が生まれ、社会の矛盾に怒りを感じ、ずつとその気持ちを持っていました。

市役所に入ってから当時の生活保護法を調べてみたら高校は義務教育機関ではないため保護対象外であり、当時の係長の説明は間違つてはいなかったのです。私は中学一年生で法律のことなどよく解つていなかったのですが、改めて色々な法律の矛盾について改正の必要性的な思いを強く感じました。

二つ目は、札幌の短大に入学したとき、一緒の下宿にいた医学生に「桜庭君ちよつと付き合え」と言われて訳も分からず参加したのが、六〇年安保闘争のデモでした。国会前のデモで東大生の樺美智子さんが亡くなり、札幌でも安保反対のデモ行進がありました。医学生に誘われて、暇つぶしに参加したことがきっかけで、「まなぶ」（労働大学発行）の学習会に参加、社青同（日本社会主義青年同盟）活動への参加等、学生運動、革新運動とはこういうものなのかと経験しました。

こうした二つの要素があつて、徐々に私の考えは革新的な思いを強くしていったのだと思います。

市職労の専従書記長に

（市役所に勤めて数年後に専従書記長になつていますが…）

ただ、負けん気が強く、きかなかつただけなのですが、市職労の専従書記長になつたとき、一つ心に誓つたことがあります。

市立病院に勤務していたときは、医者との麻雀が小遣い稼ぎだつたんです。独身の頃は、既婚者の先輩の当直を替わつてあげて、当直室に自分のパジャマを置いて、自分の寝場所みたいになつていました。一カ月に二〇日以上当直をして、夜中に当直医や若い研修医と麻雀をして、一日一回麻雀パイを握らなければ眠られなくらい、凝つていたんです。

それで一九六六年、組合専従になつたときに、組合員のお金で食べさせてもらうのだから、自分の一番好きなことを断つときめて、麻雀を断つたのです。それから市長を退任するまで、一回も麻雀をやつたことがなかった。麻雀をやめた頃は、麻雀の話の聞いただけで、頭に血が上り、カーツとなつたんです。だから、私が麻雀をすることを知っている人はほとんどいないと思います。自分にとっては大変な思いの決断でした。

賃上げが組合最大の課題

（当時、専従になられた頃の市役所の労働組合活動はどんな雰囲気でしたか…）

当時の組合はトロイカ方式といって、全道庁、全市連、町村連三者の連合体で自治労北海道地連を結成し、その後、産別組織として自治労北海道

本部に統一しました。名寄市職労は全市連に加盟し、高石守彦さん（三笠市職労、元自治労道本部委員長、故人）が全市連の委員長で、いろいろ教えてもらい、非常に真面目な組合でした。

この頃の大きな闘争課題は、賃金引き上げです。いま考えると差別的な言い方になるかもしれませんが、「郵便局の郵便配達より一円でも高い給料を」と訴えました。とにかく自治体職員の給与は低かつたので、わかりやすい表現として、せめて郵便局の現業職員と同じ給料を手にしよう、というものでした。この賃金闘争が組合員みんなの目標、要求だつた。

その後の高度経済成長もあり、賃金闘争、賃金水準は順調に推移していったけれど、これまで幾度となく統一ストライキにチャレンジしてできなかった。ストライキに突入したら、委員長や専従書記長はきつと捕まる。だから自治労初の一〇・二一統一スト（一九六六年）に突入するその日は、下着を新しいものに替えて緊張感をもって臨みましたよね。でも成功しことがないんだ。ストをやるとぞと懸命に頑張つていても、中止になつたりして。

専従書記長の二年目だつたと思うけど、一〇・二一統一ストライキをやることで、組合員からは、前年、前々年も、ストをやるといいながら中止になり、今回も中止になるんじゃないかという声があり、職場集会で出てきた。私はこういう性格だから、今回は絶対にストを決行する。もし中止になつたら頭を丸坊主にする約束しました。そうしたら

ストは中止になったので丸坊主にして、組合員に謝りました。そんなことがありましたね。

賃上げは組合員にとって切実な要求で、昭和四〇年、四一年ころから、地方公務員の賃金は順調に上がっていきました。

地方のまちですから、みな純粋ですし、組合活動には協力的でしたよ。こまめに職場集会も開いたし、たとえば選挙闘争では、組合員一人ひとりと面談をして、家族も含めて、一票ずつ票を固めていく、そういう地道な作風はつくりました。

現場主義というか、先頭にたつ組合の幹部が、職場オールド、職場集会をこまめにやりました。いまのように、役員を会議室に集めて提起をして終わり、ということではなく、組合の幹部が率先して職場のなかに入っていた。そして青年部活動も活発でした。

自治研活動との出会い

(市職での自治研活動との関わりのきつかけは) 科学的、論理的な整合性はないかもしれないけど、自治労、市職労の役割は地域の住民とどう連帯するかということです。それが自治研活動なんだという認識を持っていました。だから私が組合員、職員に言ったのは、率先して地域の町内会活動に参加する。市の職員は町内会のなかで貴重な存在で、大きな役割をもつわけだから。自分たち職員の労働条件を守るためには、地域の住民が市

の職員は頑張っていると理解してくれないとできません。

地域、住民とどう連帯するか。住民と連帯するためには地域での活動、町内会活動にどう組合員が、職員が積極的に参加していくことではないかと話し、活動してきました。

北海道地方自治研究所の山内敏雄さん(元自治研副理事長、同所長、元帯広市企画課長、故人)、十亀昭雄先生(道教育大名教授、元自治研理事長、故人)から教えられたことなんです。自治研の講座や研究会などに出て学習し、「そうだな」と思い実践してきました。受け売りなんです。ここからの自治労が生き残れるかの分水嶺は、住民と日常生活のなかで連帯するためには自治研活動を運動の柱に据えないと、一〇年、二〇年後に自治労はなくなってしまうのではないか。そんな気がしています。

自治労の役割は、ほかの労働組合とは違う。行政は法律や条例、規則にしたがって仕事をするわけですが、組合員は仕事や職場を離れた日常的な住民の共同の生活エリアのなかで、どう組織活動として住民と連帯できるか。私は自治労運動の盛衰を決めることになると思う。

市職労は、当時の公労協の労働組合にずいぶん教えられました。名寄市にある名士バス株式会社との組合は私鉄総連(日本私鉄労働組合連合会)に加盟していたのですが、第二組合ができて私鉄総

連から抜けるという。私鉄総連の要請を受けて、公労協が中心になって闘った名士バス闘争があり、多くのことを学びました。

当時の国労(国鉄労働組合)、動労(全国鉄道動力車労働組合)をはじめ公労協の組合運動はさまざまのものがありません。国労の国鉄闘争では、列車を止めるためにバリケード作って、発車できないようにする。こんなすごいことをするのか、といういろいろ学びました。営林署で全林野の組合員が、組合の主張を書いたステッカーを貼り、そこに一円硬貨をつける。当局が組合のステッカーをはがすと、組合は、一円玉を盗んだ窃盗だと当局を追求する。こういうことまでやるのかと驚き、勉強になりました。

(※公労協(公共企業体労働組合協議会)―国労、動労、全通(全通信労働組合)、全電通(全国電気通信労働組合)、全林野(全林野労働組合)、全専売(全専売労働組合)、全印刷(全印刷局労働組合)、全造幣(全造幣労働組合)、アル専(アルコール専売労働組合))

労働組合が市立病院に保育所をつくる

組合専従時代、鮮烈に記憶に残っているのは、市立病院に組合立の保育所をつくったことで、本当に大変でした。私も子どもがいましたし、妻は市立病院で看護師をしていたこともあって、当時、精神科の医師が、自分の子どもを保育するため、

組合を私物化して、書記長の権限で保育所つくるのは、とんでもないことだと大反対されました。

私は母親が同居していたので、子どもを保育所に預けなくてもよかったです。看護師不足のなか三交代制の勤務で大変でした。組合は、院内保育所をつくるべきだと要求したんですけど、当局はそこまで余裕がなく、できないという。

そこで、子どものいる組合員で資金を出し合っ、保育士の女性を雇って、保育所をつくることになりました。当局に保育室にする場所を頼むと、元霊安室の部屋しか空いてないという。ある意味嫌がらせかもしれません、そのときは霊安室として使っていなかったもので、とにかくやろうと一年間運営しました。

看護師さんたちは喜びましたし、当局も保育所の必要性を認識して、病院が資金を出して院内保育所つくることになったのです。これは道内でも先駆けの運動だったと思います。私は病院勤務を経験し、妻が看護師だったので、病院で働く人の労働条件、とくに看護師の労働条件がきついことは実感していました。これが組合専従時代の大きな取り組みでしたね。

市議会議員団の勉強会をはじめ

市職員時代には革新系議員団と勉強会をずいぶんやりました。自治研の山内さん、十亀先生から教えられたことの受け売りですが、当時は国労な

どが労働組合運動の中心で、労働運動の猛者ではあるけど、行政については素人です。そういう人たちが自治体議員になって、団体交渉のような質問をするのではなく、行政のことを知ってもらわなければならぬので、勉強会を頻繁にやりました。

市議会には革新系の議員が六名いて、北電の社員寮の会議室を借りたりして、毎月勉強会をしていました。私が資料をつくり、行政、自治のイロハからはじめました。組合役員が仕事で担当している行政や政策課題について話してもらったりもしました。

保守系の議員と比べて勉強の度合いが違うので、議会がはじまると革新系議員は自信を持っていました。勉強会をやっていることを理事者が知

2 組織内候補が決まらず市議選に立候補

職場に復帰、市職労大会で市議候補擁立決定

市議候補選考委員長になる

一九六八（昭和四三）年、組合専従を終えてからの職場は市財政課管財係でした。

職場に復帰するときに、財政課長の言葉を借りれば、部長会議で職場復帰の話が出てどこも引き受けるところがなかった、というわけです。たまたま財政課長は、私の母方の関係で古くからの知り合いで、どこも引き受けるところがなかった

ようになって、いい加減な対応はできないという姿勢になり、そうした効果もありました。

議員の武器はそれしかないのですから、しっかりと勉強会をやるべきだと、いまの議員にも言うのですけど、議員は個々に勉強するべきで、会派は連絡事項などの意思統一をすればいいという発想です。

いま振り返ってみると、二〇代半ばの若造が、自分の父親のような世代の議員に対して、ここは違うとか、こうではないのか、と生意気に議論していました。無礼で生意気なことを言っても、私を批判することもなく、議員の人はよく応えてくれたと思います。最低でも月一回勉強会を行っていました。

のを財政課で受けたのだから、ありがたく思っ仕事をしろよ、と言うのです。

職場に戻って三年ほど経ってから、市議会議員に立候補しましたが（一九七一年四月）、私の人生は、ダークホースの人生で、事の始まりから本命になったことがないんです。

一九六七年の統一自治体選挙は、自治労道本部が組織内議員を出す、と方針を掲げた最初の選挙です。大きい都市や産炭地のまちで、組織内市議一七人が誕生しました。東京都では美濃部亮吉さんが知事になった画期的な統一選でした。

これ以前には、函館市議の金田一茂さんとか、小樽市議の島津信太郎さん、札幌市議の枝元雅雄さんなど、自治労から推薦を受けて当選した議員が何人かはいました。組織内候補を出す方針を立てた六七年の統一選挙が第一期生の議員で、道北では沼田進旭川市議（六七）、故永峰和男士別市議（七〇年）が活躍していました。私は四年後の七一年に議員になったので二期生です。

六七年の道内選挙での組織内市議の誕生に刺激を受けて、名寄市職労も七〇年秋の定期大会で、翌七一年の統一選挙で組織内候補をだすと方針を決定しました。このときは、組合専従役員を降りていましたが、私は市議候補選考委員会の選考委員長になりました。先輩職員や組合活動家の何人かに立候補してくれないだろうかと言いました。当時の名寄市の職員には、現職市議の子どもがいたり、議員の親戚が多く、市職労としてまとまらないと言われていた状況でした。だからという訳ではないのですか、それぞれ理由があり、次々に立候補を断られました。秋の市職労大会で翌年の統一選挙に組織内候補を出す方針決定したので、一二月になってもまだ決まらない。

責任をとって市議に立候補 まさかのトップ当選

選考委員会で候補者を決められないのは、選考委員長に力がないからで、選考委員長は責任をとっ

て立候補しろ、という話になったのです。

これも一つの誤算だったのですが、一つだけ条件を出したのです。私は状況がわかるから、立候補を判断してもいい。ただ、自分からは言い出せないで、母親を説得してくれ、母親がいいと言えれば立候補する、と条件を出したのです。

兄弟姉妹のなかで男は一人だし、せっかく市役所に入ったのに、当選するかどうかもわからない市議会議員に立候補することに賛成するわけがない、母親は絶対反対すると思っていた。

年明け間もない頃、選考委員会の何人かが自宅にきて母親と話したら、いとも簡単に、私の人生でなく、息子の人生だから、息子がやると言うのなら、私は反対しないと言うのです。反対すると思っていたのが、いいですよとなり、ここから、ダークホースの人生がはじまった。

私が市議会議員の候補にふさわしいと周りも誰も思っていなかったろうし、私自身も思っていなかった。でも候補者がいないので、しようがないから、責任をとって立候補することになった。

田舎のまちゆえに、しがらみが多い。市議会議員の子どもが市の職員にいるとか、議員の親戚がたくさん職員にいるとか。組織内候補・市職労推薦であれば、社会革新系の候補と鮮明になっってしまう。だから、組織内候補としてまとまるはずがないと思われていた。私の立候補が決まっても、地元紙の報道は泡沫候補の扱いでした。勝てるはずがないと。

立候補する以上は勝ちたいけど、正直言っても勝てないだろうなと思っていました。このときは二九歳で、市役所は途中で入ったのだし、だめだったら別の道があるだろうと覚悟を決め、不安感や悲観的な気持ちはなかったですね。

名寄市職労初めての組織内候補の選挙ですから、組合も頑張ってくれました。組合員の家と近所の人に声をかけて、お茶の間懇談会（お茶懇）をきめ細かくやりました。

初めてのことで、当時の組合幹部は必死でした。組合員一人ひとりから、家族や親戚が支持してくれるか聞き取りをしました。間違いなく家庭に投票してくれるかとね。そういう地道な運動をやってくれました。

私が子どもの頃から知っている名寄新聞の伊藤政男社長に、市議会議員に立候補しますと挨拶していくと、開口一番「なあ桜庭君、君は声が悪い、だから声で勝負できない。何で勝負するか」と演説の中身だ」と言われ、市民にわかるように自分のやりたいことを政策として出せと教えられました。手振り身振りを含め、演説の仕方を指導してくれて伊藤さんにお世話になり、いい勉強をしました（伊藤さんは保守系候補として道議会議員に二回立候補して落選したのですが）。

そして選挙結果はトップ当選でした。いままで名寄市議選挙で得票したことのない一三〇〇票超える得票でした。私はもちろん、応援してくれた人も驚きました。二期連続でトップ当選をし、三

期目はトップをとれませんでした。

名寄女子短大の存続を決意

候補が決まらず、責任をとるようなかたちで立候補することを決めましたが、そのときに決意したことがあります。

名寄市立大学の前身の名寄女子短期大学存続が風前の灯火だったんです。短大の運営にはお金がかかり、当時の総務部長や財政課長、そして議会も、短大は市長の道楽だから早く整理しろ、という考えが大勢でした。

でも私は、絶対に潰すべきではないと職員のところから思っていて、組合専従時代には短大を存続させるための署名活動もしました。市議会議員になつたら名寄短大をなんとしても潰さないという思いでした。

短大の開学は一九六〇（昭和三五）年で、私の同級生が一期生です。女子短大ではなく、共学の短大だったら、私は札幌へはいかに、地元の名大に入ったはずなんです。その方が金銭的負担も少ない。こうしたことがあり、なんとしても短大を残したいという思いでした。さらに、十亀先生や自治研の講師から、これからの地域づくりのために、高等教育機関は絶対に必要だと教えられ、短大は将来の名寄のマチおこしに欠かせないの思いを強くしました。

もう一つは、なぜ名寄に女子短期大学ができた

かです。当時の池田幸太郎市長は（一九五八年、七四年まで在任）、剛毅な人でした。元々は薬局店を経営している薬剤師で、大学卒業後に数年内務省に勤めていました。市長になって、市立病院の看護師と栄養士を探したけど、田舎のまちに来てくれる人がいない。人を集めるのにこんなに苦労するのなら、自前で人材を養成しようという思いに至って、短期大学をつくることを決意したのです。

ところが、いろいろ調べていくと、看護師や栄養士を養成する大学は理系なので、施設整備にお金がかかるし、教員を集めることができない。これは大変なことで、とにかくお金がかかってしょうがない、というのが助役以下、事務方の考えでした。

この頃は、条件の悪い土地に本州からの開拓農業者の農民がたくさんいて、栄養状態がよくないため、栄養失調をはじめ病気になる人が増えてきました。この人たちへの栄養指導をするために、栄養士が必要だけど、人が集まらないから大学を作ろうという思いで市長は発案したのですが、結局事務方は、市長に短期大学という名前をとらせて、大学の中身は家政科という、言葉は悪いですが花嫁修業の大学で、お金のかからない短大としてスタートしたのです。

そうした経緯だったので、なんとしても大学を守り、池田市長が考えていた開学の精神に戻さなければならぬ、と私なりに考えたのです。市

議会議員になつたら、私のライフワークというか、私の仕事としてやりたいという思いがありました。

組合員に支えられ議員活動 党書記長として各級選挙を仕切る

私の議員時代は、組合と党のために時間をたくさん使ったといっても過言ではない。もちろん地域の課題についても活動しましたが、意識の大半は自治労運動をどう進展させるか、日本社会党の勢力をどう拡大するかということに大きな勢力をそそいだと思います。

四期市議をやりましたが、議会の常任委員会、総務文教常任委員会の経験しかありません。経済建設、市民福祉の委員は一度も経験しなかった。職員の賃金労働条件に関わることは、総務文教委員会にかかっているので、委員会の委員長、副委員長にならなくてもいいから、とにかく総務の委員ということでやってきた。こんなわがままは、いまの時代では通らないですよ。

市職労の組合員の皆さんに支えてもらって議員活動をしているわけですから、自分に与えられた任務の第一には、職員、組合員の安定した生活を地方政治の場でどう守るかが、私の議員としての一番大きな使命だと自覚していました。

また、道北の稚内市、留萌市、富良野市で自治労組織内市議をつくりたいと願ひ的に各市職労にオルグ活動を重ね、野崎良夫留萌市議、岡谷

繁勝稚内市議、故千葉薫富良野市議が誕生し、連携した活動が出来たことも忘れたい思い出になっています。

第二に、日本社会党名寄総支部の書記長として、各級選挙を切り盛りしてきました。市議会議員選挙、市長選挙、道議会議員選挙、知事選挙、衆議院と参議院の選挙を懸命にやってきました。

大変だったのは、なんといっても市長選挙です。独自候補を立てることは容易ではなかった。公労協労働組合の力は低下してきたし、一九五四（昭和二九）年以降、名寄は自衛隊のまちなり、隊員が約二〇〇〇人、家族を含めると倍以上の人数になります。道議会議員選挙は革新系の候補を必ず出したけど、負けつづけました。

選挙はとにかく大変でした。候補発掘から、政策づくり、選挙資金の対応など、組織をつくって選挙に臨むわけですが、核になって仕切らなければならず大変でした。年がら年中、選挙をやっているような感じでしたね。

畜産基地問題、議員になって中止を提案

議員時代に畜産基地、生薬公社が破綻する問題がありました。一九七〇（昭和四五）年に国営広域畜産基地開発事業が、公共育成牧場、大規模草地造成、大型農業機械導入、多頭飼育等を目玉に始まりました。

私が議員になってまもなく、名寄市と隣の美深

町にまたがって、畜産基地を開発するために事業が動きだしました。しかし、いろいろ試算してみると、美深がこの事業を行うのは無理だから事業から撤退することになった。名寄と美深の条件がそれほど違う訳ではないし、共同でやるから計画した事業なので、美深が降りるのなら、名寄も降りた方がいいのではないかと、議員になったばかりの私が議会で提案したのです。

この事業がはじまったのが七〇年、私が議員になったのが七一年で、議会の一般質問のなかで提言をしたのですが、執行部としてのメンツがある。この事業は、地元が手を上げるのではなく、国からの働きかけが強かった事業で、名寄は降りませんと突っ走ったのです。

そして、皮肉なもので、この事業が立ちいかなくなり、私が市長になってから、私の手で整理することにになりました。畜産基地事業は農家一〇戸が参加してはじめましたが、三戸が離農し、離農した農家の負債が三戸で一〇億二六〇〇万円、そして残った農家も一戸平均九四四〇万円くらいの負債を抱え、大変な状況になっていました。

畜産基地問題は、国から言われて断り切れずに実施して、参加した農家は大変な苦勞をし、行政は事業の後始末するため相当財政負担をし、失敗した事業だった。

生意気なようですが、議員になって間もないですけど、私の提言を受け入れてくれていたら、名寄市は数億円の負担をせずにすんだと思いますね。

素人商法で生薬公社が破綻

池田市長は薬剤師であるがゆえに生薬公社を構想しました。人間の体を健康にするためには漢方が必要で、主に生薬の原料となるセンキュウ、トウキといった薬草は置戸町、常呂町など北見・網走地方が主産地でした。生薬業界は旧態依然とした業界で、畦買というのでしょうか、畑で薬草の生育具合をみて、たとえば一反あたり五〇万円を話をつけ、よし売った、買ったとなるわけで、そうした商慣習だったそうです。

これでは生薬農家の経営は不安定になるから、科学的に薬草を維持・管理し、販売ルートを確認するために、生薬公社の構想が出たのです（一九七〇年、公社設立）。名寄でも生薬を作っている農家がいきましたが、今日でも道東地域で薬草栽培が多いのは、秋の晴れた期間が長く収穫後の天日乾燥に適しているからです。

一方、名寄をはじめ道北地域は降雪時期が早いので、天日乾燥ができないので、生薬農家が育たない。このため、機械乾燥することにして、道東で栽培された薬草を生薬公社で仕入れ、事業がスタートした。

道東から薬草をたくさん集めたのですが、乾燥するまで保管しておく場所がない。いま振り返ると失礼なことをしましたが、市から出向している公社の専務に対して、商売で勝負するのだとつたら、

机の上に置いておくのは自治六法ではなく、商法だろ、というようなことを言って議論をしました。

公社は市からの出向職員と新規採用の職員で、商売の経験のない素人の集まりです。乾燥させる前の葉草を、屋外で野積みしていたので、発酵して腐って使いものにならなくなり、パレたら困るからと火をつけて燃やしてしまったのです。

結局、生業公社の収支は大赤字になり、五年ほどで事業はやめました。公社と直接関係ないかもしれませんが、また善意でやったのでしようが、赤字を埋めるために誰かの口車によって、大沼公園での魚のテラピア養殖に投資をして失敗したり、似たようなことが何件ありました。

議会で公社破綻の責任追求と葛藤

今でも心を痛めているのですが、公社の専務は解雇という懲戒免職にしないで、普通退職して退職金をもらい、年金も受給しました。故人の先輩ですが、この問題で激しくやり合ったので、身内の人には、いまでも見かけると顔を背けられ、恨まれています。

でも、行政に数億円の損害を与えた張本人ですから、懲戒免職になってあたりまえです。とはいえ先輩ですし一〇パーセント譲歩して普通退職にしたのですから恨まれるはずはないのですが、立場を変えれば人間の感情はそうならないですね。

そこが議員を経験してきて、つらいところですね。みなそういう気持ちがあるから、最終的には振り上げた拳を下ろし、矛を収めることになる。いまでも自分の命題として、考えたり、悩んだりすることです。

議会は行政をチェック、監視するのが役割で、議会として当然のことですが、ガンガン厳しく追及した結果、専務は退職せざるを得なくなりました。責任をとるとはそういうことですから、一〇パーセント減俸三カ月で終わっていいのかということですよ。

しかし、正しいこととして責任を追及していくと、必ずそういうことが起きる。恨んだり、恨まられたり、胸の痛みはありますね。悪いことはしてない、と自分に言い聞かせても情として、本人は別ですが、家族や親戚がいるし、親戚は私の選挙を一生懸命応援してくれましたからね。そんなことを考えると踏み込めないことがあり、議員の皆さんがそういう気持ちを持っていると思つています。だから逆説的に言えば、第三セクターや行政で問題が起きても、何となくそこそここのところが終わってしまうのではないのかな。

実際には、市長が公社の専務を辞めさせるのですが、桜庭が議会でそこまで追求しなかつたら、辞めることにはならなかつたと見られる。そういう苦しみがあります。

一般論として議論するのは簡単なことですが、そのような場面に直面したときどういう決断をす

るかです。議会はチェック、監視する役割に以上、感情を抑制し、毅然としてやらなければならない、役割、使命を持つているのです。議員にその認識があるのかどうかを私は問いたいと思つています。

結局根っこには、公の金だし、執行側そして議会の側にしても、個人の懐が痛むわけではないし。最終的に公のお金で処理するから、玉虫色でそこそこの決着になる。

いまより将来が大変だから、という意見もありますが、将来をしっかりとるためには、いま起こっていることのいいこと、悪いこと、問題の所在を明確にしなければいけません。

ダメなものダメ！！と言い切る勇氣と信念が求められるのでは…と思つています。

議会と理事者との関係

(池田市政に対してはどう臨んでいたのですか、全面対決ですか)

池田市長は当時の地区労(地区労働組合協議会)の推薦を受けて、名取忠夫さんと選挙を戦い、当選しました。保守系の人ではあるけれど、私たちの意見も聞いてくれた。池田市政とは対立的な関係ではなかつた。

生業公社問題も、池田市長の理想を手堅くすめていく補佐する人がいたら、失敗しなかつた気がするのです。あるいは市長が任せつきりだった

のかもしれないけど。

畜産基地問題は、池田市長というよりも、市の原課と道庁、国・開発局との関係ですすみ、事業を受けざるを得ない状況になっていったと思います。

（議会と理事者の関係はどうでしたか）

保守系の議員は無原則に市長に追随していたと思います。私たちは何でもかんでも反対するわけではありませんが、会派として市政を質していたと思いますよ。新年度予算でも私たちからみてだめだと思えば、反対しましたし、決算不認定の動議を出したりもしました。

いまの議員にも言うのですが、執行部提案のここに反対したとか、意見を言っても、最後に賛成してしまったら、審議の過程でそういう意見もあつた、ということにしかならない。逆説的な言い方をすると、会派は少数だから反対をしても提案のまま通るのです。反対したことを明らかにしておけば、将来、名寄の歴史を見たとき、あの問題で革新の側は少数意見で通らなかつたけど、反対をしていたと立証できる。通るから反対してもしようがないと全会一致で賛成するのではなく、票決では反対をするべき…と想っています。

議員勉強会が活動の武器に

組合の専従時代、議員の勉強会をやっていました。私が議員になってからも勉強会はつづけま

した。反自衛隊闘争をやっているわけですから、我陣営が質問に立つときは、必ず自衛隊の問題を絡めるようにし、教育と自衛隊、農業と自衛隊、福祉と自衛隊というようにやりました。

勉強会は私が議員を終えるまでつづけ、保守系の会派からどうしてそんなに勉強会をするのかと言われるくらいで、勉強会が私たち社会クラブ会派の武器だったんです。少数会派ですけど、勉強会をやっているのです。市の執行部側も一目置くようになり、私たちの主張を尊重してくれるようになりました。

課題別に市の担当職員に講師になつてもらいました。資料作成や資料収集は大変でしたけど、私も若かつたのであまり苦にならず、自分の勉強にもなりましたね。

お世辞ではなく、資料として自治研の所報「北海道自治研究」に目を通し、内容に基づいて議論をしました。所報は自治体議員にとって勉強するための資料になりました。だから、目を通さないと、積んでおくだけなのは、不勉強の証拠だと思えます。熱心に活動している議員は、自治労の組織内以外でも、所報を読んでいます。議員が学び、育てていくための基礎資料にすべきだと思つています。

町内会の全役員が辞めたため書記に

市議会議員になると同時に、居住している地域

三〇〇戸の町内会書記を担当しました。町内に移ってきたのは、議員になる五年前で、組合活動や社会党の活動で忙しいので、寝るときだけ家に帰ってくる状態で、地域の活動にあまり顔を出していませんでした。

議員に当選をしてから、町内会長をはじめ全役員が町内会の書類を風呂敷包みでもって来て、おまえは大層なことを言つて議員になつたのだし、役員は全員辞職するから、桜庭が全部やれと言うわけです。役員はほとんど保守系の人ですからね。私は、会長だけは残つてください、一番大変な書記をやらせてもらいますと説得し、市長になるまで町内会の書記をしました。

町内会でいろいろなことをやり、日本赤十字社の年一回の寄付・募金があり、皆さんあまり考えずにお金を出していますが、本来は町内会・自治会で行う活動ではありません。年額五〇〇円を出すことによつて一年間日赤の社員になることなのです。赤い羽根の募金とは違うのです。なぜこれを町内会がやるかというと、手数料収入があり、町内会の財源確保の一つになっています。それと日赤の社員になる意識を持つてもらうために、町内をいくつかの班に分けた懇談会をやつて理解してもらおう。いろいろなことをやりましたよね。町内会憲章づくりだとか。町内会で五項目の憲章をつくり、毎年一項目ずつ実践目標にする。

当時の社会教育、いまの生涯教育として、一つの町内会で六カ月一二回の講義を行うアカシヤ大

学というものをつくりました。堀達也道知事のと
きに、上川支庁がよく認めてくれたと思いますが、
一町内会でホームヘルパー三級の認定講習会をア
カシヤ大学の一環として行い、三年かけて一〇〇
名のヘルパーを養成しました。

アカシヤ大学（町内会運営Ⅱ私立）の活動に触
発され市教育委員会はピヤシリ大学（教育委員
会運営Ⅱ市立）、市立東小学校区で東小コミュニ
ティーカレッジ（校区住民運営Ⅱ公立）とそれぞ
れ特徴を持った高齢者の学ぶ場所が設立され活発
な活動が行われています。

私の住んでいる西町三区町内会に追いつけ、追
い越せと、ほかでも活動は活発になってきたと思
いますよ。私の持論として、議員はいろいろな団
体の会長を引き受けないことです。いなかのまち
なので、議員というだけで通用するし、地域団体
やボランティア団体の会長は、ふさわしい人を議員
がサポートして、長にならない方がいい。名寄は
町内活動が活発だと思っていますよ。

名寄女子短大の授業料値上げ 短大存亡の危機を乗り越えて

市議時代に「市立短期大学を守る活動」をしま
したが、現在の名寄市立大学になるまで、存亡の
危機が何度もありました。

かつて道議会議員が仲介してこんなことがあり
ました。家政科の市立女子短期大学だと道は引き

受けられないが、市立病院に准看護婦養成所が
あったので、大学をやめて看護婦養成の高等看護
学院にするのであれば道が引き受けるとなり、九
割型その方向でまとまりそうだった。しかし、市
議会では大論争になり、結局その話を潰しました。
一方、短大の財政負担が大変だったので、大学
を維持するために授業料をあげる必要があり、大
学授業料の検討委員会をつくりました。委員には、
名寄新聞社の伊藤社長、市議会からは革新系の委
員として私、自民党系からはのちに道議会議員に
なる若手の伊藤議員、民間から一人、計四人の委

3 自前候補による市長選勝利が悲願、敗北覚悟の出馬

市長選挙に出たのも、ダークホースの人生だか
らです。

社会党名寄総支部の書記長として、市長選挙を
闘う。自分たちが市長候補を擁立して選挙を闘い、
自前の市長をつくりたいという思いでした。

当時の石川義雄市長は（一九七四年〜八六年ま
で在任）、名寄で唯一、東京大学卒業の秀才で、
かつ人のいいおじさんでした。私は石川市長に対
して反対ばかりしていましたが、よく話は聞いて
くれた方でした。

時効ですが、こんなことがありました。名寄市
職労の執行委員長の人事異動内示を直断判で阻止
する人事にまで口出したことがあり、いま考え
たら私は悪い市議会議員だったと思います。

員会です。議論を経て答申をつくるときに、伊藤
社長が、この中で一番若いのは桜庭君だから、い
まままでの議論をまとめて答申書を書けと言われま
した。当時、本州で開催された自治研全国集会（自
治労地方自治研究全国集会）に参加した出張先ま
で、委員会の会議録や資料を持ち込んで、集会に
出ないでホテルで答申書を書いていました。そし
て結局、授業料は値上げしました。

理系の看護学科を設置するまでは、地方交付税
だけでは大学の運営費を賄いきれなかった。学生
の数にもよるのでしょうが。

若気の至りですが、議員のときは好きなことを
やり、面白くしようがなかった。こうした議員
活動を経験してきたので、市長の仕事というのは、
大変な仕事だと思っていました。政治の道に身
を投じたのですから、チャンスがあれば道議会議
員の選挙に挑戦したい気持ちがありました。しか
し、市長になりたいという気持ちは全くありませ
んでした。

私は性格的に責めるのは得意だけど、すぐ頭に
血が上るので、守るのはからつきだめなんです。
会派には先輩議員がいたのに、市議四期目のとき
に副議長になったのは、次の統一地方選挙で道議
候補になるための箔付けだったのです。

意中の候補が市長選挙直前に辞退

社会党名寄総支部の書記長として、自前の市長を誕生させるのが悲願です。とはいっても自衛隊のまちで、革新系議員や組合活動家を出しても選挙に勝てる見込みがない。我が陣営の考えを理解し、一緒に行動できる保守系の人を市長に立てようと、選挙の二年前にAさんに白羽の矢を立てました。

狭いまちですから、私とAさんが夜にあつて話をする、翌日にはまち中にうわさが広がりますから細心の注意を払いました。隣の士別市で私の同級生が鮎屋をやっていたので、その部屋を借り、Aさんは商売をしているので夜の九時頃から幾度となく話し合いの場をもち、出馬の確約を得たので、市長選挙へ向けた準備をすすめることになりました。

市長選挙の直前、議員会の視察で訪れた弟子屈町川湯温泉で夕食懇親会が始まったときに、旅館の人が私への電話を取り次いでくれました。まだ携帯電話のない時代です。電話に出ると市長選挙に出ると確約してくれたAさんで、出馬を断念すると言います。驚きました。

事情があつて、立候補の約束をどうしても守ることができない、出られないと言います。市長選挙告示まで二〇日くらい前のことで、その日の議員会の懇親会で何があつたのかまったく記憶がなく、名寄に帰るバスのなかでは、これからど

うしたらいいだろうか、そのことで頭の中はいっぱいでした。

名寄に戻ってきてAさんに話をきいたら、拓銀（当時）の支店長がきて、Aさんあなたが市長選挙に出るとの噂を耳にしたので、銀行の方針として、選挙に出る場合は融資などの貸し付けは一度整理するので、引き上げさせてほしいとなつたのです。しかし、返済するお金はないし、親が創業した商売を潰すわけにもいかなから、市長選挙に出る話はなかつたことにしてほしい、ということだったんです。

無投票を避けるため立候補を決意

どうしたらいいだろうと考え、悩みました。当時の市議会会派の議員、社会党名寄総支部の役員、市職労の役員は、しようがない、候補の擁立は見送るといのが大方の意見でしたが、これまで中心になつて準備してきた自分としては納得できなかった。

無投票にだけはしたくなかつたので、当時の名寄市職労の山谷委員長に話があると鮎屋で会い、「とにかく俺が市長選挙に出るから、俺の葬式を出してくれ、一切条件はつけないから」と頼みました。

しかし、山谷委員長は反対します。来年の統一選で道議会議員選挙に出すつもりでみんな準備しているのに、市長選挙に負けたので道議選挙に出

るというわけにはいかない。市長選挙は断念しろと迫られました。立候補させてくれ、ダメだと、何時間もやりあいました。

そのうち山谷委員長はかなり酔つてきて、押し問答の末わかつたと了承し、その日の夜行列車の急行利尻に乗って朝、自治労道本部にいき、北村英人委員長（故人）に校庭が市長選挙に出ると報告したんです。名寄地区労の菅野議長（国労）には、全道労協（全北海道労働組合協議会）の森尾昇議長（元自治労委員長、故人）から、どうしてもラバさんを選挙に出さないとならないのか、なんとか説得してやめさせられないのか、と電話があつたそうですよ。

こうして、市長選挙に出ることになつたのですが、すんなり決まつたわけではなく、翌年の道議候補がいなくなるので、市職労や党の本音は私を市長選挙に立候補させたくなかつた。私自身も道議選挙に出たい気持ちが強くなりましたしね。

負けを覚悟した恐いもの知らずの闘い

市長選挙に出ても一二〇パーセント負けるだろうと思つていました。ただ、市長選の八カ月後に統一選挙で市議会議員選挙があります。そこで私は考えたのです。市長選挙は間違ひなく落選するから無職になる。政治活動をつづけたいので再度市議としての活動の場を与えてほしいと訴え市議選に出馬をすれば、年齢はまだ四四歳と若いのだ

し、市長選挙に負けて多少同情票もあり、最下位で当選できるだろうと何の根拠もなく生意気にも思っていました。ですから八カ月浪人すれば、無職ではなくなると考えていました。

もう一つ、私に勝った新市長の公約を一つずつチェックして、議会で徹底的に対決し、追求しようという思いがありました。四年間、議会質問の材料に事欠かないだろう、と頭のなかにありました。

市長選挙まで二〇日間もないなか、急いで選挙政策をつくらなければなりません。市立病院の看護師で自治労組合員の妻と自宅で話しあいながら考え、「そんなできないことを公約にしているのかい」と言われると、「負けるからいいんだ。俺が公約にすれば、相手も公約として出さざるを得ないから、市長になってからなぜできないんだと責めることができる」と、選挙に負ける前提で公約をつくりました。

ところが私が選挙に勝った。当選の知らせを受けたとき、妻は開口一番「お父さんどうするの」でした。選挙が好きだから市長選挙に出ていいと言ったけど、市長になっていいとは言わなかったよ、できない公約ばかり出してどうするの、責任とれるのかいと言われました。このときは私自身もどうしたらいいか困りましたね。

話は前後しますが、勝てると思っていないので、怖いものがない、好きなようにやり、商店街のお店を一軒ずつ一人で回りました。

商店街は、これまで社会党がなかなか入っていないところで、顔見知り、行きやすいところへしか行かない、それが我が陣営の弱点なんです。それは裏返しに言えば、労働組合に力があつたので、組合員と家族とその周辺を固めれば、議員選挙では大丈夫だった。だからそれ以上踏み出そうとしない。でも、一対一の首長選挙ではそういうわけにいかない。

私は図々しく、相手がいやそうにしても「立候補した桜庭です。よろしく頼みます」と握手するんです。そうするとある店主は「市長候補になる人が一人で来て、無理矢理握手していくなんて初めてだ。大体誰かお付きの人がついたり、むしろのようなどころには代理の者は来ても、本人は来ないなあ」と言うんです。人間開き直るといろいろできるものです。

土砂降りの雨のなか駐屯地前で演説 自衛隊員の反応が変わる

市長選の立候補表明のとき、朝七時から毎日自衛隊前で演説をしますと宣言し、次の日から実行しました。自衛隊員の票がほしいからだろうとか、自衛隊を容認したのかとか、いろいろ批判されました。でも私の思いは違うところにあつたのです。

妻と話したのは、いままで田舎の活動家として賑やかにいろいろやってきたけど、反自衛隊闘争の急先鋒だったので、自衛隊駐屯地前で演説をし

ても誰も聞いてくれないし、冷ややかな目で見られるだろう。それを告示まで自分自身耐えてやりきれるかどうかが、活動家としての真偽が問われる。冷やかな目に耐えてやり通せば本物だと。誰も振り向いてくれないからと途中でやめたら、いままでの活動家としてやってきたことは偽りになる。それを試すためにやるということで、自衛隊の営門から三〇〇メートル離れたところに女房と二人で立ってはじめたんです。

話した内容は、いろいろな考えの人、いろいろな職業の人が、一つの地域で生活をしている。暮らし、生活している人の安全、安心を守るのが首長です。国会議員そして首長も政治家だけれど、首長は行政の長として役割が違う。私の思想どおりに市政を運営することはない、ということが一つです。

二つめは、名寄の歴史は一〇〇年にも満たないまちです。自衛隊員の皆さんは日本中からきているのだから、歴史の古い地域で育った人は、まちづくりに対しての経験やアイデアを持つているでしょう、それを名寄市民として教えてください。みんなで住みやすいまちをつくりましょうと、そんなことを話しました。

相手陣営も翌日から、候補者本人は来ませんけど、駐屯地正面営門の前で自民党の宣伝カーに、自衛隊協力会婦人部の女性を含め大人数で、私個人に対する批判や社会党に対する批判をガンガンやるんです。

ちようど街宣を始めての中間点あたりのとき、演説をする朝七時から八時頃までの一時間くらいバケツをひっくり返したような土砂降りの雨になったんです。真夏の雨だから冷たくないし、若さを売り込むにはちようどいいぞと妻と話して、土砂降りのなか出かけ、下着までびしょ濡れになりながら演説をしました。さすがにこの日は、相手陣営はやってこず、多分私も来ないと思ったのでしょね。

その日を境に、しらつと通っていた自衛隊員が、こちらだけに見えるように手を振ったり、軽く会釈する人が出てきました。妻も不思議だねといつてね。

自衛隊票がなければ一万票も得票できませんし、本当に不思議なものです。

名寄始まって以来の人であふれた街頭集会 多くの人の応援で市長選に勝利

(選挙の終盤にかけて盛り上がりを感じましたか)

選挙は落選すると思っていました。当時の地区労という地域の労働組合組織はしっかり活動していましたし、組合員と家族の支持状況を丁寧に確認していました。自治労も道北地域を中心に各地から組合員が応援に来てくれました。そのときに自治労の力はすごいと思いましたね。

後に衆議院選挙にでて、旧七区小選挙区管内の

二四市町村を回ったとき、各地域の自治労組合員から、最初の市長選挙のときに応援に行き、一〇戸訪問すると半分以上が支持してくれて驚いたと言っていました。隣に道職員の人が引越してきた、美深に赴任したとき市長選挙の応援にきた、と言っていましたね。

地区労の幹部が支持の数を積み上げてみると、おかし、本当だろうかと思うくらい〇印が多かった。ひよつとしたらいけるかもしれない、という話を投票日の二、三日前にしたのですが、私はそのことを一切聞いていませんでした。

私自身は当選するわけがないと思っていましたが、ひよつとしたらと感じたのは選挙戦最後の集会でした。横路孝弘知事が応援に来てくれて、ある人は約三〇〇〇人と言いますが、こんなに名寄市民がいるのかと思うくらい市街地中心の街頭に人が集まりました。名寄市はじまって以来の集会で、二度とないだろうと思うくらい集まりました。私も街宣車に上がって見ると、あまりの人の多さに足が震えました。

そのときには、ひよつとしたらと感じましたが、頭の隅には自衛隊のまちだからなあと思っていました。私は反自衛隊闘争の急先鋒でしたからね。ホークミサイル部隊(第四高射特科群)の名寄駐屯が決まったとき、駐屯地への集会デモ行進でも先頭について、駐屯地前の看板を蹴飛ばしたときの写真が、たたみ一畳分の大きさに相手側陣営事務所の前に立ててあったのです。桜庭が市長になっ

たら、自衛隊は直ちに名寄から撤収するようなことを宣伝されましたよ。

市長選挙は一九八六年八月二四日投票され、私の得票が一万七九〇票、相手候補の中尾忠司さんが九三二八票。一四〇八票差で私が当選しました。さつきも言ったように公約をどうしたら実現できるか、悩みました。

(次号以降につづく)

本稿は、二〇二〇年一月二三日に行ったインタビューの内容をまとめたものです。聞き手は、山崎幹根・北海道大学教授(当研究所副理事長)と当研究所編集部。